

# 第18回むつ市総合教育会議議事録

開催日時： 令和3年10月24日（13：30～15：30）

開催場所： むつ市 プラザホテルむつ

出席者： 宮下 宗一郎 市長  
阿部 謙一 教育長  
田中 志昌 教育委員  
納谷 順子 教育委員  
黒木 和之 教育委員

事務局	教育委員会	角本	教育部長
		鷲岳	政策推進監
		祐川	副理事（学校教育課長）
		櫻井	副理事（図書館長）
		工藤	教育委員会総務課長
		木村	中央公民館長
		金浜	川内公民館長
		二本柳	大畑公民館長
		山崎	脇野沢公民館長
		佐藤	学校教育課総括主幹
		新田	総務課主幹
		谷川	生涯学習課主幹
		佐藤	総務課主任
		角本	総務課主任
		関	総務課主任
		高島	生涯学習課主任
		笹谷	中央公民館主任
		村市	図書館主任



# 1. 開会

**事務局：** お待たせいたしました。只今から第18回むつ市総合教育会議、教育講演会黒田剛氏講演会を開催いたします。

今回は講師として青森山田中学校副校長、青森山田高等学校サッカー一部監督であります黒田講師をお迎えし、「常勝チームを作った最強のリーダー学」と題して講演いただきます。講演に入ります前に、むつ市総合教育会議議長であります、むつ市長宮下宗一郎が御挨拶致します。それでは市長をお願いいたします。

**宮下市長：** 皆さんこんにちは。

まずですね、黒田監督にお祝いを申し上げます。このたび、高校総体優勝、誠におめでとうございます。米子北戦。皆さんそうなんですね。ゼロイチ、1点ビハインドから、もう負けるんじゃないかと思っていたら、試合終了間際。1点取って同点に追いついて、さらに、延長戦も、ずっと攻めてるんですが、1点が入らない。延長後半にPKになるのかな、PKになったら、ちょっとあの去年の悪夢みたいなですね、そういう状況の中で最後の最後に1点を決めて、暑い夏、なかなかトップになれなかったこともあったかもしれませんが、本当に感動しますよね、本当に良かったなと思ったら、いつの間にかファンになってしまうところが、青森山田高校サッカー部のすごいところがありまして。

私自身も選手権すごい楽しみしていますし、なんといってもむつ市出身藤本君がですね、今活躍していますので、コロナ収束すれば私も応援行っちゃおうかなというぐらい、すごく熱烈に応援させていただいております。そういう意味では今日は、青森山田高校サッカー部指揮官として紹介させていただきます。

もう一つ余計な話させていただくと、県内で、県内の公式戦371連勝。すごいですね。

そして何といってもですね、私が高校の頃から、私、青森市内の高校でサッカーをやっていた頃から、勝ち続けている。20年位無敵の状態、私もおそらく青森山田高校の勝利に貢献しました。そういう意味では、素晴らしい成績を残し続けていることに、深く深く、私は感銘を受けております。

そのご縁があって来ていただいたわけではないですが、私たちむつ市では、総合教育会議で、各界の講師、超一流の講師と皆さんとお話しして、むつ市の子供たちの教育のあり方、それについて議論を深めているところです。教育のあり方、それを語るときに、やっぱり部活動の要素はなかなか。子供達にとってみると、学校なんで行くの？部活動しに。そういう風なことを言う子どももいるぐらい、部活動というのは子供達にとって、重要な要素だと思っています。

ただ、私の立場を明確にしておけば、中学校での部活動を義務化するということについては、基本的には感心していません。ただ、一方で、健全な人格形成や健全な子供達の成長にとって部活動を欠かすことが出来ないものの一つなんだという風に捉えているところでございます。

中学校の中ではどうしても勝利至上主義になったりとか、まあ、あるいは無理して練習させて怪我させるとかですね。子供の発育成長に応じた練習の過程がなかなか組めない。そういうこともむつ市内の中学校で散見されているということが、非常に私は、これは大変なことと実は思っています。ただ、そうした環境も私たちの力で改善していかなければいけないと思いますし、現にこの最強チームですね。青森山田高校でレギュラーを変えることができますから、出ているという事実があります。だからこそ、私たちは、部活動という物事を通して、子供達の人格を形成し、その育成に寄与する方策をこれから教育大綱を作るに当たって、1から0から考え直す必要があるのではないかなというふうなことで、今日は黒田監督を講師にお招きし

て、そのヒントを得るということでお話を伺いたしたいとこのように考えてございます。

今日は私自身も講演を最後まで聴かせて頂きますし、その後は教育委員の教育長、教育委員の皆さんと、黒田さんとディスカッションをさせていただき予定でございますので、少し長丁場になりますが、私自身も楽しみにしていました。皆様も最後までよろしくお付き合いしたいと思います。冒頭、私からのご挨拶をさせていただきます。黒田監督よろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

**事務局：** 講師紹介

ビデオ上映

**事務局：** それでは講演に入りますが、講演はトーク形式で行います。トークのお相手はエフエム青森アナウンサーの境香織さんです。それでは黒田監督、境さんお願ひいたします。

## 2. 講演

**境氏：** 今日アシスタントをさせていただきます、境香織と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。、

ここからは、ソーシャルディスタンスが保たれているということで、監督はマスクを外しますね。マスクを外してお話をさせていただきたいなと思っています。

**黒田氏：** 皆さん、こんにちは。青森山田サッカー部の黒田と申します。今日はお招きいただきまして、誠に有難うございます。現在、青森市で全国大会出場を目指して頑張っているところがありますけれど、このむつ市のスポーツ、また部活動の発展、又は教育というものに関して、少しでも力になれるのかということで参りましたので、何か今日のお話の中から1つでも持ち帰って、各現場で活かしていただければ、幸い

で御座いますので、拙い話になると思いますが、どうぞよろしくお願ひいたします。

**境氏：** よろしくお願ひいたします。皆さんには20分ちょっとの映像をご覧いただきました。あのサッカー選手権大会からもう半年以上経つてますので、ちょっと記憶も風化されていたところ、意外と思い起こしていただいたかなという気がするんですけども。私自身も何度も見ているかなと思っても、悔しい瞬間をこの映像の中で改めて感じることができます。ということで最後ね。あの映像にアンダーアーマーの映像が流れていた、雪の中のあの映像ですね。あのチームが今、今年頑張っているチームということですよ。

**黒田氏：** そうですね。インターハイ優勝したチームですね。

**境氏：** そうですね。まあ、この夏のインターハイでは優勝ということですし、また、なかなかコロナの影響でプレミアリーグも後半戦いよいよスタートしたというところなんですけど、後半戦始まっている1試合、2試合経過しましたが、大宮との戦いは1-0で、そして先週はですね、4対0で流通経済大柏に勝ちましたけれども。今年、このチームになって、今大会の成績を見て監督はいかがですか？

**黒田氏：** もちろん、インターハイで優勝したら、またそれまでの人生もそうなんですけども、まあ、全国の中で相当マークされるチームになってですね、本当に研究されることが多くなった。また、ここ7月あたりの試合ですけど、優勢であった柏レイソルですとかFC東京。それから大宮アルディージャ、この辺ですね。Jリーグの中では名が知れたチームですけど。まあまあ、相当研究されてですね、もう繋いでこないですかね？もう蹴りっぱなし、蹴って走って山田のプレスを全部かいくぐるくらいで、逆に東北大会の我々よりもJリーグのチームの方が、我々

を意識して戦うような展開が最近ちょっと増えてきたなという感じがしますね。

**境氏：** まあ、それは注目もされれば研究をされつくすんじゃないかなと思いますけれども。このインターハイの優勝、2005年以来なんと16年ぶりということなんですよ。なんかイメージ、サッカー選手権、冬の大会ばかり目立ってしまうような感じがするんですけども、この夏のインターハイとサッカー選手権はどんな違いがあるんですか？

**黒田氏：** そうですね、表面的な形としては、35分ハーフ、夏は35分で、冬は40分ハーフ。またプレミアリーグは45分ハーフということで、前後半ということですね。10分ないし、20分の時間が変わってくるということ。又は組織にみられる、スケールですね。メディアの数の違いや観客の数も違う。まあ、夢の舞台であり、選手権は最後の大会ということで。これがもうチームづくり最後の集大成ということですね。いろんな思いをここに全てぶつけてくる体制になりますから。また、夏っていうのはですね、先ほど優勝といただきましたけど、16年ぶりになりますけども、やっぱり夏の大会というのは本当に足だと。大体ピッチ温度が50度近くなりますから、その中で走れというのも酷だなというぐらいのコンディションです。だから、足がつる者、熱中症、そんなものと常に戦わなくてはならない。だから、その中でいろんなことを試行錯誤しながらやりました。今年是比较的気温が下がって、あまり高くなかったんです。それから、試合と試合の合間に一日休息日を設けられるのが、すごくコンディション作りにはすごくいい流れ。まあ、そのおかげで、コンディション作りが成功したという印象ありますね。

**境氏：** まあ、そんなインターハイで優勝しましたけれども、むつ市出身の選手で先ほどね、あの

市長も冒頭でおっしゃってましたけれども、藤森颯太選手ですけれども、インターハイでも活躍しましたし、このプレミアリーグでも結構活躍してますね。

**黒田氏：** そうですね。あのサイドアタッカーとして、瞬足が取れるドリブラーなんですよ。または、気持ちも強いし、今、キャプテン松木がすごく有名だと思うんですけども、この松木にも、もう厳しく言うタイプ、チームにとってはすごく頼もしい選手として、欠かすことのできない選手の一人という感じですよ。

**境氏：** プレミアってすごくサラサラなんですよ。個人的には意外なんですけど、だからね、彼が走っていくと、サラサラサラ、キラキラキラっていうなんかキラキラの尾を引いて走っていく姿がとても印象的なんですけれどもね。藤森颯太選手もむつ市出身で。あ、そうなんですけれども、今の20分のVTRを作ったのも、むつ市出身の成田先生。先生してさらにコーチ。

**黒田氏：** 中学校のコーチを専門にやられてますけれども、はい。すごく立派な方です。こういう動画を作るのもね。それなりの腕前です。

**境氏：** 監督の映画に対する要望があまりにも激しいので、それにしっかりと応えてくれる成田先生ということなんですよ。

ということで、むつ市の皆さんも青森山田の優勝だったり、こういったものに貢献する形で頑張ってくれていますけれども。

その先程も話にありました、キャプテン松木 玖生選手ですけれども、松木選手も大きいニュースがあつて。先週発表されて、今、アンダー22、U22日本代表松木選手追加招集ということで、今、丁度福島に行っているんですよ？

**黒田氏：** 追加というので、色々難しい部分がありますけれども、協会から電話が来て、明日、急

遽だけでも、来られるでしょうか。もう急なんですね。そんな感じで。あの卒業生でも居るんですけども、その先輩を差し置いて。大変ですから。かなり名誉な召集ですけど。

**境氏：** 今回は、今の代表っていうのは何処に繋がっているんです。

**黒田氏：** 結局、あのパリのオリンピック。ここが、このチームでっていう、目標になっていると思うんですけど、その中にオーバーエイジとして3人枠の中に入れていけばと思うんですけども、そういう形で、オリンピック終わったばかりですけど、次のパリ目指してという感じです。

**境氏：** すでに研修での召集。今もう練習に参加しているということですね。まあ本当にこう、この一年、去年、今年とコロナ禍における部活動って本当に大変だったと思うんですけども。特に今年1番はね、1か月間は県の方針で部活動が出来ないことが多かったと思うんですが、監督いかがでしょうか？そういったものに対しての工夫とか。

**黒田氏：** 本校の場合は、ここは授業の一環でね、公立高校を中心に、本当に全国でトップを目指そうとしている部活動に関しては、もうこの上無い辛さが。活動を止められるぐらい辛いことはないです。それが本当に本当にうちの場合は結構いろいろ強いクラブですから、本当に、朝一時間だけやるとかね。なんかそんなことをやってきましたけれども。なんか、もちろん関東地域もそうですが、緊急事態宣言が出されている地域でも、部活動やられましたから、そういう事を考えると、なんかこう複雑な心境ではありましたが。

でも、その中で、あの宮下市長がね、一時間の部活動をやるって、あれは本当に勇気づけられるし、さすがだなと思って。ちょっとメールさせていただいたんですけども。うん、やっぱりそういうことですね。やっぱり部活動は止めないで、または感染対策にきちっと応じながら、うまく動けばそういうのではないと言うこ

とをきちんと示してくれているというのは、我々も大いに感謝しています。

**境氏：** そうですね。青森山田は部活動で注目されているからこそ、その9月の1か月間、外で部活をしているのは、もしかしたら住民から苦情が言ったかもしれないですね。

**黒田氏：** 特にあの青森市の教育長が山田のすぐ近くに住んでますので、できるだけっていう感じで、常に校長に指導されておりました。

**境氏：** いろいろね。内輪で大変なこともあるかなと思うんですけども。まあそのコロナ禍でも一生懸命、それぞれ個々の思いに向き合いながら、きっと体作りにがんばったんじゃないかなと思います。青森山田高校サッカー部。中、高合わせて330人いるんだそうです。330人というのは、なかなか1つの学校ですよ。

**黒田氏：** そうですね。もう18年からスタートしたクラブが、まさかこんなに多くなるかもしれないでした。それぐらい、夢を追いたい子ども達が、全国の子ども達が、目指してくれるということなので、できるだけウェルカムという体制を整えながら、私を入れて11人のコーチでバックアップしながらやっておりますので、今のところ大きい問題なくしっかりと順調に続いているかなと思います。

**境氏：** 青森県内のみならず、県外、そして国外だったりするわけですよ。あの本当にそんな風に国外からも選手が着ている。雪国、青森に、なんでこんなに人が集まるんだろうかと疑問を抱くことも多いですね。

**黒田氏：** そうですね。やはり雪国だから嫌だという人も中にはいると思うんですね。だけど昨日おとといと福岡県へ向かったあたりで、ちょっとこう講演がありまして、そこに行ってたんで

すけども、福岡の子たちは、2年後、青森山田に行きたいという子供たちも結構集まったんですよ。だから、そういう意味では、本当にこう、今我々が育成または結果というところで。全国に発信しているものがしっかりと届いているなって言う。改めてね、そういう印象を持ってたし、今、雪があってもそれをストレスと感じないように、これをどうやってパワーに変えようかという風に、やっと落ち着いて。この10年ぐらい、それがすごく良い結果を生んでいると言う風に思うんです。

今、雪国の話が出たので、そのついでなんですけども。以前は、まだ若い頃は、雪というのがストレスでストレスで。多分選手権直前の12月ぐらいで降られた雪というのはチーム作りにとってはもう本当にこんなことがあっていいのか、他のチームにどんどん離されていくような印象を、または1月選手権が終わってから新チームを早く強化しなきゃならないという時に、まあゴール半分ぐらい、1メートル50センチぐらいの雪が積もっているとなったのが本当に辛かったんです。

けど、あるとき、ドキュメンタリーの1つ、こういうシーンを見ていた。あの野球の落合博満選手が、キャンプで、キャンプというのは1か月以上あると思うんですけども、その時にあのホームランバッターがバットを一切握らないって映像みたいなのがあるんですね。これだけのホームランバッターなら、誰よりも早くバット握りにいってるのかなと思うと、バット握る前にどんな体力作りをしているんだろう、そしてバットを握りたくて握りたくてしょうがないというタイミングでバット握っているということで、ちょっと見た時に雪国のチーム、これだとちょっと感じたんですよ。もう割り切って、自分の体作りということに割り切ってやってみると、春先に自分の成長といういうんですかね、速く走ることであったり、キック力が増していることであったりなど、この自分の成長に気づける。雪の降らない地域だと自分

が成長したかもなかなか知るタイミングがない。だけど、この危機感を持った人によって、自分が出来るようになっていく、または飛んでるって言う、そういうふうに気づけるようになるのは、やっぱりここの特徴だということも。改めて凄いなこの雪っていうのは。と、いう風に感じたと思うし、また、そう割り切ってやるようになってからは、そういう子供たちもあの自分の強化に対して前向きに取り組むようになったし、すごくこうポジティブな感じで、この雪の時間を過ごすようになりますよね。それがまた良い結果に結びついているというふうにも。まあ、すごく良い循環が出来たなという感じがします。

**境氏：** 青森を飛び立った選手たちが、いろんな雑誌なんかで必ず語っている。青森山田ってどんなところが大変だったかみたいな。その雪上でのトレーニングが1番大変だったって誰もが言ってますよね。まあそれだけ過酷でしょうし、それだけ時間もかかるでしょうし、まあでもその後の春が最高に、きっと身体が軽い状態でコンディション良くサッカーすることが出来るんじゃないかなというのはね。彼らのインタビュー基準みたいな。いつもそういう風に思いました。でも、本当に雪が積まれた中で、もう。外の住民からはどんなふうに練習してるのか見えない状態で、青森山田のグラウンドの中の雪に埋もれている中で、何かしら響く練習場の中でも知っているということなんですよね？

本当に青森山田からたくさんJリーガーが生まれて、柴崎選手をはじめ、もう今までで毎回、こういう風にトークショーを私ずっとさせていただいているんですけど、ちょっとずつニーズが増えているので、毎回分かんなくなるんですよ。

**黒田氏：** 現在のところは54名ですね。内定を入れて54名とJリーガーが。もう1人決まりそうな子がいるので、今年は55名があるんじゃないかなって。私が監督やってた27年って

いう、27年で55名じゃないかなという感じですね。

**境氏：** 本当にそれだけFC 東京に松木玖生選手も内定が決まったということで、いつ決まるんだろうみたいな。松木、私も思ってたんですけども、FC東京に決まってほっとしたところですけども。

サッカーの技術だけではなくて。まあその人間力を育てるっていうことが、監督は大切にしているんじゃないかという、むつ市さんからの提案で、社会を生き抜くためにどのような指導を心掛けているんでしょうか？ いろんな指導があるし、ちょっと難しい質問かもしれないそうですね。

**黒田氏：** あの本当に難しいと思うんですけど、まあ、我々青森山田というのは、高校の部活動と、中学校もそうですけど、一部活動だから、教育というものにサッカーという活動を載せていくという考え方で、クラブチームではないので。また、サッカーという部活動を通じて教育していくという、こういう関係性ですから。ですから、スポーツっていうのは人を育てるためにはもってこいのチャンスであり、そういう機会です。すごいチームであればあるほど学びがすごく大きいと思うんですけども。ですから仲間のためにも自分の為がそうですけど、仲間の為にまたお世話になっている親の為にね。先生のために、指導者の為になって色々「為」も付けられますけども、もちろんひとりの人間として社会で生き抜くためには、どういうメンタルが必要かという、そういうことを通じてきちっと目標にひたむきに取り組んでいくその姿勢。一切の妥協を許さないで、自分自身に厳しく生活していくっていうことも、これ自体が最終的には社会に出たときに生きていく術だと思うんですね。ですから。まあ、中学、高校時代に、この教育というものについて、例えば礼節部分であったりとか、モラルやマナーという事の上にサッカー

という競技が積み上がってるんだよって言うことをしっかりと浸透させていく、又は理解させながらチャレンジさせているということ。まあ、これがやっぱり社会を生き抜くための1つの大きなポイントになってくるのだから。だから、あえて社会でなんて言っても、いきなりこの社会に出てどうのということではなくて、何を培うかということを考えて言えば、1つの目標というものに対して揺るぎない努力をしていく。そうやってプロセスというか、積み上げてきたものが社会を生き抜くための精神につながっていくと思うんですね。

**境氏：** よくこんな風に話をしていると、よく柴崎岳選手の話が出てくるんですけども、本当に彼はもうサッカー以外のことは考えていなかった。そのためにいろんなものをある意味犠牲にしたというか、その目標に向かってとてもストイックだったという話がありますけれども、そういうことの1つですよ。

**黒田氏：** 自分の生活、あのいろんな欲もありながら、そういったものを犠牲にする、我慢をしていく、辛抱していく。そして、その中で1番欲しいタイトルを取りに行くんだ。または、自分のやりたいプロになって行くんだっていう、そこはブレません。本当にやっぱりプロになり、日本代表と活躍する選手は、やっぱりそうブレるのってほとんどいない。サッカー、サッカーのために授業を受けたり、サッカーのために人と会話をしたり、常にこう自分が向上する事を念頭に置きながら、生活24時間365日をコントロールしているんだなっていう。

**境氏：** 結構、大人の方と話をしているのが好きだったって話ですよ。

**黒田氏：** そうですね。岳の場合は、もう同級生とか、下級生とかはしゃべってないですからね。

だいたい同級生又は監督、コーチと話をして、まあ探究心がすごくある子なので、Jリーグのこと、日本代表のこと、または海外のこと、いろんなことを常にキープするわけ。ですから、あの1冊の本に書いたんですけども、試合が終わって、もちろん映像を撮りますけども、その撮った映像ビデオをバスにつないで、バスのモニターに繋いで、もうみんな疲れて、ぐた一つて寝ている時に、彼はノートとペンを持って私の横に座って、その映像を再生しながら、これ監督どう思いますかとか、ここ自分こういう選択したんですけど、なんかこう携わりありますか？。こっちも疲れて寝たいのに寝させてくれないというのがあり、その帰りのバス6時間ぐらいつつとビデオ見ている。それくらいやっぱりすごいなと思ひ出す、そんな感じで成長してますね。

**境氏：** 松木選手も先日のインタビューでね、人のプレーを見て、こういう風になりたい、羨ましいって思うけど、その羨ましいで終わらせない、全部自分のものにしないではいけないという風に、自分は天才じゃないからという風に語っていたんですけども。彼もそういうところがあるような気がしますね。

**黒田氏：** そうですね。今の青森山田のチームは、みんな多分 そんなモチベーションとかそんな思考を持っている人たちが多いと思います。だから、なんて言うんだろう、ちょっと珍しいぐらいハングリーな精神を持った子たちの集合体じゃないかな。今年は特に思いますね。

**境氏：** なねかね。ハングリー精神を持った若者が少なくなってきたって個人的には思うんですけども、そんなことはあまり話題にあがるってことないですよ。

青森山田に行くと、まあサッカー部だけではないんですけど、とにかく挨拶が良いんです。本当に礼儀正しいんですけど。これもやっぱり指導の一環なんですよ。

**黒田氏：** そうですね。挨拶はしないよりはしたほうがいいので。ただ挨拶をしなさいというアプローチはあまりしないですよ。あの、しなさいという強制力を持つわけではなくて、する事の意味、意義っていうのはどういうものかということきちんと理解させること。まあ挨拶なので、どんな挨拶だろうとお互いきちんと目を見てしっかりと会話をする、言葉を交わす。又は、全く自分の知らない人がグラウンドに来たとしても、監督やコーチを通じて来たお客さんは、間接的に自分たちの世話を見ていると言う風に理解すること。また、大人になって社会的に出たとき、その人と関係を持つかもしれない。環境その時に良い印象良い感触を持って、このグラウンドから帰ってもらうこと。だから、悪い印象を与える必要ないんですよ。常に笑顔で本当に爽やかな学校だった、チームだったと思って帰ってもらいたい。やっぱりそれが我々スタッフ又は選手達がそういう心構え又は意識でお客さんを受け入れる。まあ、そういう体制をしっかりと日頃から取っているということがあります。それが、大きい笑顔の挨拶という風に変わってくるということなんですよ。

**境氏：** 自然に出てきますもんね。挨拶はね。だからいつもグラウンドに行ってもすごくいい気持ちで帰ることができますし、逆に褒められすぎてとても申し訳ない気持ちになります。

サッカー部中高合わせて330人ということで、トップレベル選手が多い、多いいっていか、まあ330人いれば、トップのチームがあればトップじゃないチームの方が多いいので、まあそれなりに挫折というのを味わう選手、子ども達が多いかなという気がするんですけど。監督は、この挫折ってどう思うんですか？

**黒田氏：** そうですね。330人いますけど、高校で240名位おられます。もちろん試合に出るトップチーム、セカンドチーム。そして、A、BとするとC1、C2、D1、D2というカテゴリー

リーに分かれています。で、これに全てのコーチを配置してチームを組織しているんですけども、まあDチームにいるからそれが挫折かという、私はそうは思わない。または怪我をして、それぞれの現場から離れてしまうことを挫折とも思わない。何をもって挫折かということなんでしょうけど、確かに試合に出ることを自分の中で夢を見て、そこに向かっていくわけですから、試合に出られないことが挫折と言ってしまうかもしれないけど、でもそれは私が青森山田でサッカーを一生懸命やろうという1つのチャレンジと考えた場合には、全然挫折ではないというふうに考えられるわけです。で、もちろん、その小さい失敗だとか、それからレギュラーになれなかったこと、自分の努力が足りなかったこと、またはちょっとしたことからケガをしてしまったこと。これすべてやっぱり自分の人生なので、それはみんながみんな成功するということはないわけであって。ただ、このチャレンジをやっぱり将来を考えた時は、それを素晴らしいと言う風に評価してあげなきゃダメだって。これは挫折と言うかもしれないけども、私にとっては挫折ではない。または、こういう経験を積み重ねていった方が社会に出た時に、大きな挫折に会わなくて済むというか、社会でまたは自分が妻子を持って、いい歳になった時に、大きな挫折に遭わないためにも、今、小さい失敗や挫折は多くしておいた方が良いということですよ。だから、その痛みを知っている者が、最終的には将来そういう場面でぶち当たったときに、その痛みを味わったコントロールできる、自分の人生をコントロールできる、また、チャレンジをコントロールできる。そして他人の痛みをわかってあげられるということに伝わっていくと思うんです。だから本当にいっぱい失敗することは素晴らしいことだという、そういう観点のものと考えた方が良いと思うんですよ。ですから、まあ中高で起こってる挫折は挫折と言わない。逆にこれでチャレンジをすることを怖がっていたとすること、また、

挫折をすることを怖がってチャレンジしない人間、そういう生徒になってなっていく方がよっぽどもったいない。そうすると人生、大人になってからチャレンジするのか。絶対にしません。大人になってチャレンジしない。そんな状況を子どもの時から作るわけにはいかない。ということですよ。だから、チャレンジで成功した後は、また次の大きなチャレンジをしていく。それに成功した者は大きな挫折しても、また、大きなチャレンジをしている。こうやって人間としての器を広げ、そしてチャンスに強い人間になっていく訳ですから、最終的に大人になって社会が出て大きい挫折をしないためのすべて準備期間だという風に考えるべきだと思います。

**境氏：** ですね。まあ捉え方それぞれですよ。そういった失敗した記憶とか辛かった記憶というのは、もちろん必ずバネになると思いますし、よく監督は危機感というものがないと、その何か向き合う時に危険だっていう話をしますけれども、それもまた同じような感じですか。

**黒田氏：** そうですね。いろんな勝負事なのでね。人生ってそうでしょうけども、やっぱり常に危機感と背中合わせですかね。失敗っていうものを背中に負いながら進んでいるのがやっぱり人生ですから。絶対失敗しない人生じゃないし、それから危機感がない人生なんてないし、やっぱり常に小学校、中学校、高校ぐらいでは、いろんなそういうメンタルがちょっとこう弱まるようなこと、それからくじけそうになることもどんどん経験してやっていくことになるね。大人になった時にやっぱり成功するのが安定した生活を送れるということにも繋がってくるのではないかなと思います。

**境氏：** 挫折を恐れて何かをしないなんてもったいないと本当に思います。監督、多くの選手の中で結果を出す選手ってきつというと思うんです

けども、その今までたくさん見てきた選手の中で、こいつ違うな、もっと違うな。この人、結果を出したな、出すなって、こう直感みたいなものがありますか？

**黒田氏：** そうですね。結果というのはどちらかというと、まあ逆の発想から考えるべきなので、Jリーグに行った方、または日本代表になったこの取り組みってこうだったような振り返るものだと思うんですけどね。今、ここでこういう能力を持っているから、こんな頑張りをしているから将来有望だなとか、必ずJリーグだと言って言うことは ないですね。考えにくい。だからやっぱり成功したものの取り組み、またはその性格。そういったものには(39:05)必ず?? (特徴)があって、こういうことをやったら最終的にはこういったんだってというような印象や感想出ることあるんですけど、今のこのうちからまたは入学してからさあ、これからこうなると思うのは、なかなかじゃないかな。なぜなら、人それぞれですけど、やっぱり性格がありますから。この性格っていうのが入学する前までわからない。よくドラフトで、野球でドラフト1位2位に入った選手が、翌年にはクビになってるなんてことよくあるんですけど、要するに、試合で勝ったとか、そのときのテクニカル的なものをまたスキルっていうところを評価されてね、将来有望だと思ってドラフトでもかかっていると思うんですけど、その時点で性格がわからない。これはもう入学と一緒に、性格がわからないので、その子が努力家なのか、誠実に人の話を聞けるのか。そういうのもわからない状況だったら持って生まれた運動神経というもの。ここまでやってきた選手がいっぱいいるわけですから。だからそこが見えないと思う。それはやっぱり、中学から、高校の頃、部活で教育というものを通じて、少しでもそれがいい方向にもっていければ。可能性は低いし、俺の性格がこうだというので、全く変えようもない。せっかく良い物持ってるのに変えるつもりもな

いってというのは、やっぱり最後はどっかでフェードアウト。または周りから見放されてしまうということもありますよね。

**境氏：** 性格ね、これだけは分からないですもんね。そして元々持っているものだと思うので、まあ、そういう意味ではある程度の青森山田から、例えば日本代表になった選手とか。性格は良かったですが、変な言い方ですけど。

**黒田氏：** いいか悪いかというと。うん、微妙かなあ。あの何でもいいかということ、うん、本当にこう、ただ誠実ですね。素直にはいって言っているのが良いかということではなく、大成するために必要な性格だということは言えると思うんですよ。だからもう絶対的な負けず嫌いである、何をするのにでもやっぱり率先して負けないための手法が常にあり、行動をとること、そういう正確は、やっぱりこう何か多少正確にこうムラがあったりしてても 必ずやっぱり良い方向に導かされるようになるでしょう。その魂というか、そのパワー。だから、多少の性格の悪さがあった方が良いのかなという風に思いますけど、ただ、やっぱりここ1番の指導者の言うことを聞くとか、人の話に耳を傾けているし、人に一歩歩み寄って考えてあげるとか、そういったところというのはやっぱり持ってなければ、それは本人に言ったとしても大成しないですよ。

**境氏：** 負けず嫌い、監督も1番の負けず嫌いじゃないかなと思いますけどね。

事前にむつ市さんの方からですね、質問を少しいただいていたんですけども。高校生のコーチングを長くして来られて、義務教育に望むことは何ですか？義務教育に望むことなので、中学生までにしておけばいいこととか、どんなことにつければいいのか？

**黒田氏：** この高校という立場から、小学生や中学

生で求めたいことって、やっぱりいくつもあるんですけども、ただ、これが社会的にOKなのか、教育という観点からOKなのか、それはちょっとわかりませんが、まず、風潮的に誉めて伸ばす。または得意なことを徹底して伸ばしましょう。っていう風潮がありますよね。これがちょっと個人的には違和感があるわけですよ。で、褒めましょうといったときに、それにその観点でこうアプローチする先生方が、何でもかんでも褒めるという感覚になってしまいますよね。褒めるって言うのは褒められる方も褒める方法もちろん、わだかまりもストレスもないですから、そこには何も生じないですよ。で、発展するため、また成長するためというのは多少なりとも衝突があったり、蟻行があったり、いろんなやっぱりストレスが生じる。それは言われることがあるから。そういう風に考えると、例えば何かをやって、たまたま成功することもあります。サッカーやって、たいして上手くはないんですけど、思いっきり打ったシュートがたまたま入ってしまったということもあるし。それを褒められてね。たまにいいね。だから。我々がやってほしいと思うのはそのチャレンジすることってさっき言ったと思うんですけど、チャレンジすることをまずチャレンジする勇気を褒めること。その結果を褒めるとかっていうんじゃない、チャレンジをして、また根拠を持って何かを成し遂げようと思って成し遂げられたものに対しては褒めるけど、褒めてもいいと思うんですけど、たまたま成し得た結果に対して褒めることは本当に有用なのか。なぜなら2回3回って続かないのだから。そこには根拠がないから。だから褒めて伸ばすのを、褒めて良いものとそうでないものというものを見極める。または、チャレンジっていうものに対しての評価というものをきちっと見られるようになること。それってすごくいいですね。あとは、さっき言った得意ですね。得意な事を伸ばしなさいって。結局この得意なことをやってきたら、結果、その得意なことって、上に行

けば良いところを潰されるわけですよね。おまえはスピードあるな、足速いな。だからスピード生かしたプレーをどんどんやれって言って、スピードスピードでやってきたんだ。でも、高校に入ったらスピード潰すことは簡単。走らせなきゃいいですから。体を付けちゃうけど、じゃあそこに残っているのが何があるかという、何もないわけですよ。そんなことも含めて結局はなんでもやれる選手、なんでもやれる人材を育成することってすごく重要だと思うんですね。でも、これって得意なことをやらせている、やらされてる側もすごく納得いくし満足もいくし。すごく気持ちがいいんですよね。でもそれって実際には将来を本当に高みを目指してやっている子たちに対してはすごい無責任なコーチだと言う風に思うんですね。だからこれがつぶされてもこれでいける、これでいける。例えばサッカーであればスピードだ。お前はヘディングが強いから、背が高いからデフィンスだ。ってそんなのはいくらでも調整できる。足が速く点も入れられる、体力があつて。そういう選手がいた方がいいに決まってるじゃないですか。例えば、アナウンサーやってたって滑舌が良いから褒められ、実況も出来たり、または、いろんなワイドショーとか、そういう考えているいろんなことができる方が、アナウンサーとしての付加価値またはスキルとか評価されるわけですよね。だからどんな分野でも色々なことをやっぱり出来ること。それで本来持っている特徴得意というのがさらに出来ることなんです。だからスキルなんていうのもそうですけども、得意なものがあるんですけど、これを伸ばそうと思っても、自分の完全なるウィークポイントを持っている限りは、そんなに伸びていかないですね。だから、ウィークポイントをせめてアベレージまで持っていく。みんなの平均値まで上げることによって、さらに得意なところができるっていう。そういう考え方ですよ。ですから、やっぱり指導に携わるということは、言いたくないことを言わなきゃいけない

いし、そこに人間関係の火花が生じようとも蟠りがあるうと、その子の将来のために言っていかなければならない。やっぱりそれが難しいところですよ。ただ、小学校の低学年だとか幼稚園だとか、まだまだこれからその興味、またはいろんなものを知ろうという時にそれを止めないというのはちょっと違うと思うので、だから年齢、それからカテゴリとか、あとはそうですね、レベルとかそういったものをよく考えながら、匙加減っていうのをしっかりとコントロールする。それがやっぱり指導者や教員の腕の見せ所だと思うけど、うん。そういったものがちょっとやっぱり。これからの教育に関して。そうすると、高校や大学に行った時に、すごいやっぱりこう自分に自信を持った子どもや学生というのが増えているんじゃないかなっていうふうに思います。

**境氏：** なるほど。得意なものをただ伸ばすのではなくて、できれば不得意なものをなくした方がいいということですよ。そのような、指導しているのはどうかということ。

**黒田氏：** 私ね、今は水泳出来ないんですよ。泳げないです。昔からもう頑として水泳だけをやったこなかったんですよ。だから海行っても怖いし、怖いというかね。顔を洗うのも怖かったぐらいだったんですよ。例えば空は鳥に任せれるし、海は魚に任せれるし、我々は陸でずっと思ってたんですけど、今となってみれば水泳やってれば良かった。海沿いでそばを泳いでいる人を見ると凄くうらやましい。うん、やっぱり何でもできたらいいと思う。ちょっと後悔する。

**境氏：** 意外な弱点を発見しました。覚えておこう。ということで、得意なことをただ伸ばすのではなくて、不得意なところを得意していくというのが良いのではないかという話ですよ。むつ市では、志高く粘り強い児童生徒を育てるこ

とを目標として、そのために必要なこととは何でしょうか。むつ市からの質問だったんですが。志高く粘りが強いということですね。

**黒田氏：** そうですね。それもちょっと難しいとは思いますが、一言で言うと、人のこと言うと、自分の発言、行動に責任を持たせるということに気になるかなという風に思います。あの、特に子供だから、それから、まだまだ成人していないとか、学生だから子供だからといって、全てこう親が尻拭いするような環境っていうのをやっぱり対処していかなければならない。どんな小さい子どもであってもね、自分で言ったことにはしっかりと責任をもちなさい。言ったからには諦めないで、最後までチャレンジしなさいという方向性をしっかりと身につけているということが重要だと思うんですよ。ですから、何でも中途半端にやらない。言ったことに対しては、いってみればそこがやっぱりねばり強さにつながっていることです。結果が出るので、またはそれをとことん追い求めていくというその執着心ですかね。それがやっぱり最終的に1本自分の信念を通して粘り強く生きるための道につながっていくことです。ですから、小さい時、子どもだからしょうがないよねっていう人なのか、または子どもが失敗しても子どもが何かミスをしているのか、または何をしなくてもすべて親がカバーするっていう感覚。それはもう何もできないと言うので、とことんやっぱりその際、判断は自分でさせること。道を親が決めない、子どもが自分の意志で判断をし、そして自らの意志で行動するようになり、そしてそこに責任を持たせていくという方向性はやっぱり 本当に幼少の頃からそういう習慣を作っていくということは重要だと思うんですよ。そうやって自立した形が結局誰からも助言を受けずに自分の考えで一歩を踏み出していける。そういう子たちが集合体っていうのがチームスポーツにおいても、また社会に出てからも本当に強い組織をつくっている作っていくし、本当に

パワーのある人間になっていくというふうに思います。ですから、そういったことっていうのは、今の教育っていう部分で考えてもすごく必要なことなのかなというふうに思います。

**境氏：** 習慣をつけるとすれば早いほうがいいでしょうからね。高校に入ってから習慣よりは、小さな頃からの習慣の方がきっと良いと思いますので、その自分自身から、小さくても行動や発言に責任を持たせるように親なり指導者が導いていくということですよ。

この指導するのは親でもそうですけれど、導くというのがすごく難しく。私はいつも監督の伝える力というのですね、すごいなあというふうに思ってるんですけど。監督なら伝えるということに関してはすごく重きを置いていますよね。

**黒田氏：** そうですね。指導者、教員もそうでしょうけども、人の上に立つ者又はいろんな人の前で話をする立場の者が市長であろうと、なんであろうとそうだと思うんですけども、結局一番大切、重要なスキルというのは伝える力というふうに私は思っているんですけども、サッカーの計画でその指導者が、前にも言ったかな、昨日も言ったよねとか、いつも指導してるだろうから。そういうことを言う指導者ってすごく多いと思うんですけども、結局伝えられたその直後からその子ども達が言われたことに対して素直に理解し実践をするという、その実践値を見て指導者は、あ、これは伝わったという風に自分で理解するようになって、子ども達の、また、人の行動が社会の組織でもそうですよね。社員や部員でもそうですけれども、行動が変わってなければその人は伝えたくて喋っただけで、結局何も伝わってなければ何もしないと、いっしょだということです。それを自分がこれだけいいことを話した、こんなことをしゃべった、俺もいつもそうやって言ってるよねって言ってもそれは自己満足に過ぎないのであって、やはりやっぱり行動が変わって、それに対してこう

いう結果が出たということをしちつと。それは成功しようとして失敗しようとしてね。そこに実践値から初めて伝わったということで、指導者として仕事が1つ成立したということになるわけであって、これはもうリーダーたるものっていうのは、やっぱりそういうことを伝えるというところに対しては、だから単純に伝えたいことを伝えるというのではなくて、その伝えられる側使われる側、部員でも良いんですが、きちんと耳を傾けられるように持っていくのもやっぱり指導者として必要だったんですよ。ですから、よくハーフタイムでも話をするんですけども、その時に選手が例えば3対0で勝って、ある程度安らかな気持ちになって、その時の前半は素晴らしいゲームだと、後半もその調子でいけと言う。後半良くなることは、絶対ないです。なぜなら、相手があるスポーツなので相手は3対0をひっくり返したいと思うので一気に襲いかかってくるんですから前半と同じように行くわけがないです。だから、彼らをさらにその気持ちを本気にさせようと思った時には3-0で帰ってきて、慢心的な気持ちになってきている時に、ガッカリした、期待外れだった。という言葉を取ってみたい。要するに、え、何でっていうことの、え、何でを入りの第一声に言っているんですよ。そうすると、耳をグンと傾ける。または不安でね、絶対さっきの山梨学院じゃないですけど、0対1で帰ってくるには、ガクッとして帰ってきたときに、結構予想通り、または想定内なんだ。まあ、こんなこともあるんじゃないかなって言って、やれることによってほっとして耳を傾けるようになる。結局、彼らが考えていること、または、逆の発想で第一声目をかけてあげることですよ。目的はそれを伝えることなので、耳を傾けさせること。そして、その後に伝えたいことを伝える。落とすところは一緒でもいいですよ。落とすところは一緒でもいいんですけど、耳を傾けていない、またはそういうメンタリティを持ってザワザワしている中に不安がっている、または、余裕になって

いるという状況の中で、言葉を発しても入っていかないということなので、伝えるということは、それぐらい難しいことでもあるし、重要なことだというふうに。組織のトップたるものはそこにやっぱりこだわりを持ってらるって感じになってますね。結構プレミアリーグなんてやる時には、毎週毎週朝走ったり、また神社に対して手を合わせたりするんですけど、何をその走ってる最中に考えながらと言うとか、今日の第一声目を何にしようかと考えています。子供たちに、ミーティングの時にどういうことが前回の何体何で、どっちが勝って、または、調子が悪かったり、昨日、一昨日のミーティングはどうだったのか、昨日の練習の彼らの表情はどうなのか。いろんなものを彼らは不安を抱いているのか。またはモチベーション的に上がり過ぎちゃって、ちょっと下げなければならないのか、いろんな彼らの状況を見ながら分析しながら、第一声目をトーンも含めて声の大きさも含めてコントロール、それがやっぱりトップたる者の伝え方なんだろう。(56:58)

あのよく、この間も、ちょっと裏話なんですけど、東京ヴェルディ永井監督がクビになりましたけども、いろいろ聞いていると、高体連でも厳しいこと言われているようになっていう。言葉を知らなすぎて。気持ちはわかるしね。その導き方も何だろう、雑なんだけど、気持ちはすごく分かる。熱い気持ちを子供たちに対して伝えたいんだけど、言葉を知らないから、結局言葉をまあコンビニの姓になってしまうのか、そういう言葉を発してしまってる。それが退学になったりとか、あのモラルがないというふうに言われるだけ。で、熱を熱をこう使うかという、やっぱりすごく難しい。だからタイミングもそうだし、第一声もそうだし、どこをチョイスしているかということ。これがやっぱり難しいところであると感じています。

**境氏：** 伝える力、耳を傾けさせる伝え方が大事だということですよ。あのあつという間の

時間で、もうそろそろ最後の質問なんですけれども、教育についてとか、いろいろお話を伺ってきましたけれども、最後の締めとしてはやっぱりこれなんです。今回のサッカー選手権大会で100回という節目になります。この最後に展望というか、この100回目にかける思いなどを教えていただきたい。

**黒田氏：** はい、この100回大会ってあの私も25歳から監督をやって今、100回大会、1世紀の終わりを迎えるようになって、その1世紀の終わりに監督でいられるっていう、このまず幸せなことラッキーさを感じなくてはならないと思うんですよ。ただの100回大会ということではなくて、第1回大会から9回ぐらいのことに、やっぱり戦争をはさんで3年とか4年とかっていうこの選手権が中止せざるを得なかった時も挟み、この1世紀を迎えるわけで、松木政生とかね喋るんですけど、この優勝候補って言われていること。第100回大会キャプテンでいられることを、高校3年生でいられること、この幸せなことをまず考えよう。今まで選手でいた、また、監督スタッフでいた人達が90回、70回、50回この辺ですべて終わってきた人たち。またはもうこの世の中に居ない人達も第1回出てる人達はいっぱいいると思うんですね。そこでですね、まず感謝しなきゃならないなあっていうことなんです。だから私もお世話になった、政治の方々や監督が全国各地にいますけれど、彼らですら100回大会にね、監督として采配を取れない人たちは山ほどいるけれど、まずそこに対する感謝を持った中でこの100回というものをしっかりと地に足をつけて目指すと、3冠っていうものに向けてがんばりたいと思います。ですから、まあ一日一日または1試合1試合というものを無駄にすることなく、まずはプレミアリーグ優勝を果たし、そして選手について行きたいというふうに思いますし、必ず3冠を見たいということで選手もね、本当にそこをぜひ注目していただきたい

なっています。

**境氏：** 新国立ですよ？

**黒田氏：** そうなんです。新国立競技場、準決勝から使えて、おそらく有観覧者になるかと思いますがけれども、もしあのベンチで応援してくれるかたがいましたら来ていただければありがたい。市長は来てくれると思いますけどね。

**境氏：** まず、そこで私たちが応援できるくらいまで、まずは勝ち上がって行かないといけないということですね。

**黒田氏：** そうです。

**境氏：** たくさんのプレッシャーを抱えながら指導をしている監督ですけども、耳を傾けさせるための伝え方ですとか、その子供たちの発言や行動に責任を持たせることなどなど、これからのむつ市での教育に生かせることもあったかなと思うんですが、いやらしい話をしますと、本の中にそれが書いてあるんですよ。この本持ってますか？皆さん。2冊目の本なんですけど。今日はですね。なんと1,504円のところ1,500円で販売したいと思います。ちなみに監督、昨日まで福岡だったんですけども、福岡から帰って来て直ぐに今日のために46冊持ってきているんですけど、すべて手書きでサインをしてくれたそうです。サインするにも時間かかるんですけど、この後のディスカッションが終わったら、廊下の方で販売をしたいと思いますので。よろしかったらこれからの指導に生かさせていただければいいなと思います。

と言うことで、まあたっぷりとお話をさせて頂きました。皆さんの参考になればいいなと思います。青森山田高校サッカー部黒田剛監督でした。ありがとうございました。

**事務局：** 黒田監督、境さん、ありがとうございます

した。皆様、もう一度、大きな拍手をお願いします。

それでは、ここでこの後の準備をさせていただきますので、5分程度休憩となります。休憩後15時頃を目処に黒田監督と総合教育会議メンバーでのディスカッションおよび会場の皆様からのご質問等お受けいたしますので、お席にご着席になってお待ちください。

休憩

### 3. ディスカッション

**事務局：** お待たせいたしました。それではディスカッションを始めさせていただきます。ディスカッションに入ります前に、むつ市総合教育会議のメンバーをご紹介します。

総合教育会議メンバー紹介

**事務局：** この後の進行は、議長であります。宮下宗一郎むつ市長にお願いしたいと存じます。市長をお願いします。

**宮下市長：** はい、ありがとうございます。今日は黒田監督に講演いただきました。お話を聞いてですね、この場は、我々総合教育会議メンバーから、監督の方にご質問をさせていただいて、その後、会場の皆様からもご質問等の時間をつくらせていただきますので、よろしくお願いたします。

今日話を聴いてですね、すごく思ったことがあって、それだけ強いチームで、長きにわたって日本のトップを支えて君臨すれば、そのチームをその監督として、54人プロに送り込んでいくという中であっても、なんて言うか、形を自分自身を決めていない。1番印象に残ったのは、どんな人がプロになりますかっていう話を聞いた時に、それはプロから

振り返ってプロになってから振り返っていくということが大事なんです。こういう人がプロになるというふうに、最初の時に決めつけるものではないという話が合って、そういう形を作らずに真っ白なので、選手というか、子供たちを見ていると言う姿に、すごく私はですね感動しました。まあ自分も親として何て言うんですか、子供を型にはめたがる、学校の先生方っていうと、まあ失礼な言い方になりますけども、どうしてもこうあるべきだというのは先行して。でも、あの様なことがありがちですけれども、決してそうではない、その監督の指導方法といいますか、青森山田のその指導方法に深く私は感銘しました。

私からですね。せっかくでするので、3つほど質問をさせていただきたいと思います。まず、子供たちの接し方。先ほど、伝えるということが大事だという風に、ちゃんと伝わるように伝える。そしてその伝え方にも工夫している。あるいは、その褒める叱るという話がありましたけれども、子供たちの接し方で最も大切にしていることはどういったことなんでしょうか？

**黒田氏：** 年齢学年で、または小中高それぞれ立場で違ってくるかと思うんですけども、私、やっぱり1番大切なのは距離感だと思っているんですけども、まあどんなことでも気軽に話ができるか相談できる。そして、決して偉ぶらずにいろんなアドバイスができる。まあアドバイスするためには、自分でもいろんな教養勉強をつけておかなければならないということは、もちろんですけども、黒田という監督がとても近寄りやすい、怖くてっていうような状況も作らない。だから、距離感がすごく重要になっていると思います。なので、私たちがトップチームを見て、それぞれ各カテゴリーでコーチ配置しますけども、そのコーチ陣も全てそういう距離感の中で既に選手たちの悩みごとですとか、また、進路相談

も含めてですね、やれる、またはそういう私の気持ちを知って、コーチは上に報告したり、または1つ上のカテゴリーで相談してメンバーを入れ替えているということはまめにやっていますので、やっぱりその距離感っていうのはすごくいいと思うんですよ。

子供のためにしっかりと話を聞いて、良い対策、または良い導き方してあげる。決して答えを出すのではなくて、しっかりと自分で自分の組織を考えられる、または、自分の思考の中で次の行動を起こせるっていうような体制にしていくしかないというようなことが重要になります。

**宮下市長：** サッカー以外でも多くの悩みを、高校生たちが抱えていると思いますが、何か面白いエピソードないですか。

**黒田氏：** そうですね。面白いということよりも、今はどっちかっていうことですね。この時期は進路に関してとか、又はレギュラーにギリギリ入れるかどうか、またメンバーに入れいるかどうかということで、結構、相談に来ますので、そこに対してアドバイスを講じていくというようなことはやっていますけど、もう笑っている暇がないくらい今はピリピリしてますから。そんな状態ですよ。ただ、自分の進路の中でプロになりたいという子がいれば、こういう大学に行きたいという子もいる。そういう中で、あのいろんな道筋をきちっと我々が調べてあげながら、自分で生きたい道筋にできるだけ導いてあげるっていうような感じではあります。

**宮下市長：** 2点目はですね。これだけ勝ち続けると、もう勝つことが当たり前になっていて、そのことがもの凄く子供達のプレッシャーになると思いますし、監督はもちろんそうだという風に。ただ、一方でプロセスを大事にするという話もありましたけれども、監督は、

この部活動を通じて何をご自身の人生として達成しようとしているのでしょうか。

**黒田氏：** 私ですか。 そうですね。何を達成したいということよりは、今、山田を望んで、また、そこに期待して、また、夢をかなえてくれる子たちが全国から集まっていますので、まあ自分の野望を云々よりも、まずは子供たちの夢に寄り添うということですよ。まあ自身、例えば先ほど負けず嫌いだと言っていました、負けていいという試合は一つもないので、もういいかなって思ったり、または、勝つためにいろんな準備をしている訳ですけども、そこに対して1つでもこう手を抜いている自分が見えても。又は、勝ちにこだわっていない自分がいた時には、もちろん指導者を辞めるべきだなというふうに思うのです。それは、やっぱりそれだけの気持ちを固めて覚悟を決めているので、青森山田に入学して来ている子達なのでやっぱり非常に無責任なアプローチ寄り添い方になってしまうので、それはやっぱりしっかりとやってあげたい。ただ、その中で。51歳なんですけども、まあ60までの間には、何か面白いことはないかというか、野望というか、夢というか、自分自身の内面みたいなものが出てくるのを期待している。今はまだね、そこまで余裕がないと言う状況です。

**宮下市長：** でも、本当にその子供たちの夢に寄り添うということ自体が、ものすごく私は必要な意見があったというふうに思います。

最後ですが、やっぱそういう340人部員がいて、まあ、コーチ陣も合わせると400人近く関係者が、サッカー一緒にやっていると、同じところで、監督のそのリーダーシップっていうことを考えたときに、すごく抽象的な言い方ですけど、その340人のそのサッカーの方全員と監督というものもあります。もちろん、監督っていうこと以外、高いです

よね。

**黒田氏：** ピラミッドの頂上です。 結局。 あのピラミッドですけど、あのB1B2C1C2D1D2とかって話をしましたが、中学生ということがありますから、その各カテゴリー責任者を1人ずつ担当コーチというのを配置している。私はAチームにいますので、まあ言ったとしても、Bチーム。 Bチームと手を添えて上げるぐらいの距離でしかないです。それぞれあのBの監督コーチは上に片方だけこう持ち上げる形や下から引き上げるぐらいになるか、我々が下に何かをするということは一切ないです。なので、各担当コーチに威厳を持ってしっかりと指導してくれと。指導者と何回もミーティングしながら、それを確実なものにしていく指導。 今の子供たちの現状というものは、みんなでアップして、こういうアプローチ、指導をしてくれということは、私がトップからコーチみんなに浸透させる。あとは子供たちはその担当コーチに認めて貰う為に、一生懸命やってもらい、または担当コーチからきちっと威厳を持って子供たちの指導に当たってもらい。ただ権限だけはやっぱりトップである者がしっかりと持ち、最終判断をしていくことになっているので、コーチ陣がその判断が違ふとか、または何か監督に報告をせずに勝手に何かをするというような状況になっていません。ですから、まあそういうピラミッド330人しっかりとコントロールするための縦の軸をしっかりと構築しているというのが、あのシステムですね。

**宮下市長：** ありがとうございます。まだまだ質問をさせていただきたいんですが、教育委員の皆様から今日の話聴いての感想や質疑がありましたらお願いします。まず田中委員からお願いします。

**田中委員：** 田中と申します。本日は非常に貴重

でクールでお話を対面で人がいたりして本当に心から感謝しております。ありがとうございました。

実は今日話を聞く前ですね、違うところで挫折ということに関して、非常にあの興味を持っています。我々素人の考えだとサッカーというスポーツでレギュラーにならないと挫折してあるかなっていうふうイメージを持っていたんですが、先生の話聞いてみるとなるほど、それだけ深いケアをされて、統率が取れて下からずっと上がって行けたら努力をちゃんと認めてあげられるという教育体制を非常に素晴らしいと思います。私はもういろんな意味ですね。スポーツというのは子供の頃出来たらですね、体が許す限り全部の子どもにやってほしいなあと思うし、今日話を聞いてですね。サッカーの試合をテレビで中継を見ていて、なんで子供たちがあんなに輝いて見えるのかというのは。つくづく共感できました。なるほどなど。こういう指導されているから、スタンドに子ども達に本当に真剣に応援しています。あの姿を見ただけで感動しますよね。だから私はこれからも是非ですね、こういうスポーツを通して子供たちの育成をしていただいて、これからも頑張ってもらいたいと思います。よろしく願います。

**宮下市長：** 納谷委員お願いします。

**納谷委員：** 納谷と申します。お願いします。

私の今日、あのいろいろ先生にあの質問とか考えてきたんですけども、先程の話なんか、市長の話で問題が解明されてしまったので質問がなくなってしまったんですけども、私は、普段スポーツトレーナーの先生の方の手伝いをするがありまして、競技が違うんですけども、その現場とかで手伝いをさせて頂いたりするときに、あのトレーナーの先生方が理学療法士の先生だったり、柔道整復

師の先生だったりするので、やっぱり怪我をしてくる子供達、あとは最初の試合前から怪我をしてしまう子もいれば、その試合の途中で怪我をして、まあ出られなくなってしまう子もいますし、あとは普通にコンディショニングでそのレース試合前にコーチングするために、活動をされている先生方もちょっとサポートさせていただいてるんですけども、やっぱり先生方がすごくトークというか、黒田先生もされている試合前に激励の言葉ですね。先ほど言ったイントネーションとか内容とかそういうものすごく気をつけて、試合前のロッカールームの話、あとハーフタイムの時の話、そういうのすごく気を付けてそれを喋っている風に聞いたんですけども、先生方も技術ももちろんなんですけれども、子供たちに対して、レース始まる前にいかにやる気を出させるかっていうのをすごく大切に接してやっていたらっしゃる先生がいたり、ずっとそれを間近で見ているので。黒田監督はどういう風に接していただけるのかなっていうのを聞いたかったんですけども、話を聞いたんで、いっつもなくなってしまったんですけど。その300人、高校生でも200人以上の子どもたちに対してやっぱりそのトップでやって、大きい大会に出られる選手よりは、やはり大会には出られなくて、スタンドで応援する子供たちもたくさんいるわけですよ。そのスタンドで応援する子供たちも、自分のチームが自分と一緒にこう戦うっていうふうに思って、ずっと応援してサポートしてっていう風にはできる。そのチーム作りをずっとコーチの先生がコーチの方達と先生がこう組織作りをされているっていうのは、すごくわかって、それを大切にやってらっしゃるのかなっていうふうに思いました。

むつ下北は、その指導者の問題とか、いっぱい色々あるんですけども、なかなかその子供たち、子供が少ないので競技も限られてるとか、やりたい競技ができなかったりとか

ていうその小中学校の場合だと、特に部活動に限りがあるので、その中で指導する先生たちもいろんなことを考えながら指導してくださっているの、今日の先生の話について、これからもっと良い指導者、またいい協力っていうのが出来たらいいなという風に思います。ありがとうございます。

**宮下市長：** 監督、今の話の中で、私たちよく心配しているのが、練習中よく怪我とかですね、そういう問題っていうのは、全部の学校が直面しているのです。で、練習の時間やコントロールとか、その怪我への配慮とか、こういうのがチーム全体として、どういうふうにケアしていますか。

**黒田氏：** そうですね。まず、1つがチームドクターとチームトレーナーというのが、サッカーに配置しておりまして、月曜日の正午すぎ12時半。また時間の授業終わった時に必ず病院ですね。今、厚生病院というところで小町ドクターと言う方がいるんですけども、そのバスが来てくれんですよ。もう330人から毎週のスポーツ外来などに20人を超える選手達が治療に行くんです。それが病院で外来を受けて、そして、東京から来るトレーナーにきちっと見てもらって、そして、そこでリハビリメニュー組んでもらい、山田の近くの店で、フランチイズ店があるんですけども、そこで卒業生、トレーナーがいるんですけども、サッカー部のメニューをドクターと一緒にしっかりと治している。子供たちの、中学生、高校生、すべて治療とか生徒の方、どういう症状なのか、またどれぐらいのトレーニングをして、どういうふうのリハビリ回復しているかという、全部スタッフのグループラインで共有できるようになり、そしてまあそういったところでは、まあ、保護者はその怪我に関する心配というものがないと思うんですけど、まあ、その我々のチームドク

ター、トレーナーというのが常に近くに居ることによって、骨折したりとか、そういった前兆になったとか色々ありますけども、その時に即座に対応出来るような、または即座に手術をしてリハビリできるようなシステムの構築してますので、まあそういった面では、保護者の方々も比較的安心していると思います。

**宮下市長：** ありがとうございます。黒木委員をお願いします。

**黒木委員：** 本日はどうもありがとうございました。ちょっとさすがに夏の大会まではフォローしきれなかったんですけど、毎年お正月1月のサッカーは楽しみにさせていただいているわけです。まあ10回試合して9回勝つとしても1発勝負だとさすがに全部勝つっていうのは青森山田、大変なことなんだということ、この2年見てて痛感しています。

ちょっと質問がいくつかありまして、一つ目はですね、そうですね。この15年ぐらいで突然変わったように私見受けられるんですね。例えば、東北、北海道の野球チーム、それからサッカーでも青森山田のように、屋外スポーツってずっと西高東低で、もう何10年とやってきたのが、15年前とかそのぐらいのタイミングでちょっと潮目が変わって、野球でもマーくん、駒大苫小牧ですよ。サッカーだと青森山田高校のように雪国にあるチームが全国でトップに立てるようになったという、ほんのこの10年から15年かそこいらのことだと思うんですけども。監督が先ほどのお話の中でマインドセットということですね。落合選手のトレーニングで切り口を変えてするようになったというふうにおっしゃっていましたがけれども、決定的な何か、まあなんか、スポーツ科学とかそういうのを作るのが決定的な事業というのはなんだという感じでしょうか。

**黒田氏：** そうですね。まあ15年程度で変わったという、私も27年で昔の苦労とか、それからまた便利さと考えたら、まず1番は情報量ですよ。SNSとか発達しましたし、いろんな意味で相手の分析が可能になったりとか、または、情報が安易に手に入りやすくなったこと。それから、移動手段がかなり便利になったというのがあるんですけど。東北というのはだいたい仙台まで320キロぐらいですよ。これが九州ですと福岡から鹿児島ぐらいの距離なんですから、九州の上から下まで行くのと、青森から仙台まで行くのが、だいたい同じぐらいになるんですね。ということは、あと九州を1往復すると東北を縦断できるという部分ですね。これがまた新幹線もできたし、または高速道路も。私たちが出る時は、郡山から新潟まで、この磐越道路っていうのも全然出来ませんでしたし、ひたすら新潟行くにも下道を走ってたという。そんな記憶があるんですね。やっぱ10何時間かけて秋田の海沿いをずっとバスで運転していたということだったんですけども、それがかなり便利になって日帰りでも。

東京まで試合に出るというのは、すごくありがたい話で、我々プレミアリーグの時も土曜日、東京または静岡の会議、試合やって夜中帰ってくるっていう。まあこの1泊である試合に出ることが結構あるんですけど、こういうことが昔はできなかったのが十分可能になってきた。これはすごく今、東北や北海道のチームにとってすごく有効になっていたことはですね。それがすでにレベルの高い関東あたりのチームとかなり拮抗した状態でできる。うん、これがやっぱり一番大きいのではと思うんですよ。

**黒木委員：** わかりました。多分なんかそういう科学的な、科学的というのが、社会インフラが変わったというのが、大きいんだろうなというように予想はしてみたんですけども、実

際に聞いて、あー、やっぱりそうなのかということになりました。

もう1つはちょっと精神的な話なんですけども、ちょっとあの話を聞いて、自分自身に2、3日、この2、3日考えて妻と話をしたことがありまして、その頑張ってるアートでも勉強でも、スポーツでも成功する性格っていうのがあって、それは負けず嫌いと言ったらいいんですけど、それは負けず嫌いと言ったらいいんですけど、現実にはその負けず嫌いというのは、あの負けず嫌いなことと素直であることってなかなか両立しないという、人生でいろんな人を見て、負けず嫌いな人というのは、人の話聞かない。素直な人っていうのは、話をいろいろ聞くんですけど、決断力や根性があまりないのかというふうに、あちらを立てれば、こちらは立たずの関係になっているんですけど、今まだ若いフレッシュな中学生とか、高校生の子供に負けず嫌いと言ったらいいんですけど、素直さを植え付ける方法というのは現実問題としてあるんでしょうかということですよ。

**黒田氏：** これは持って生まれた性格っていうのもあるし、親から授かった遺伝子みたいなものもあるのしょうから、なかなか一言では難しいと思うんですけど。ただ、本当に負けたくないのっていうのは、やっぱりこう素直になって人の話を聞き入れ、情報を得たり、または、することによって素直なところでのいろんな情報を得られると思いますから、本当に勝ちたいというのが、おそらく心を開いて素直になって情報をもらって負けない方法の1つとして聴くということですよ。だから、アプローチの仕方だと考えると、ただ単純に単純な負けず嫌い、じゃんけんで負けて悔しいとか試合で悔しいと言うわけではなくて、やはり負けたくないければどう自分の中でスキルを身につければいいのか。それは、人

として人の話をよく聞くことを理解すること、または自分から進んで聞きに行くこと、または、一歩寄って苦手の人に良いところを見せてあげるとか、だから、そういった自分の中で、何かそういった行動コストと言って、実際には負けないスキルを手に入れるわけだけど、そういうさっき言ったチャレンジとは そうだと思います。苦手なところに、なかなかフタをしてしまって、自分の苦手な人と接したくないとか、または苦手な者においても、この人と話したくないという考えを、自分の中でこう壁作ってシャットアウトしてしまってるようなんですけども、そうじゃなくて、やっぱり幼少の頃からというか、苦手な子であっても一歩歩み寄って接して、いいところを見て上げる、話をしてあげる。まあそういうことが結局最終的には負けないスキルとなって、その人についていく。まあ、そういった接し方、導き方を子供の頃からやってあげると言う事は重要なんだと思います。

**黒木委員：** まあ、そうですね。負けず嫌いの方に素直になった方が負けないっていうこと。まあやって行くっていうんですけど、わかりました。ありがとうございます。以上です。

**宮下市長：** なんか私に教えてもらっていいですかね？ えっと教育長の番ですが、ちょっと時間も迫ってきましたので、まず会場の皆さんから少し質問や今日のご意見というか、感想を募りたいと思いますが、どなたかございますでしょうか？ はい、どうぞ。

**市民A：** 講演ありがとうございました。えっと1つ質問があるんですけども、あの褒めるということに関して。先ほど講演の中で何でもかんでも褒めるものではない。チャレンジ精神や根拠のあるものを褒めるという話になったと思うんですけど、最後の方に発達段階に応じた褒め方という話になりました。私自身

はあの小学校のコーチとして働かせていただいているんですけども。では、小学校では、どういう褒め方をしたらよろしいのか。よろしくをお願いします。

**黒田氏：** 今触れたようにね。小学生の低学年にはどういうふうにするかっていうことだと思いうんですけど、まあ非常に難しいと思うんですけども、小学生というのは、例えば、中学生や高校生になった時に、今やってるものを取り組んでいるものをやっぱり興味をもって、または、これが本当に素晴らしいものだという感覚印象を持って次のステップに進んでいくためのその期間でもあると思うので、何かつまらない思いをしたり、それでくじけそうになったりした時には。やっぱりそれを手助けしてあげたり、またはその方向性というのをきちっと導いてあげると思うんですけど、低学年だというのは、まあ、結果を褒めるというよりは、よくそういう判断できたねとか、例えば、よくそういう行動ができたとか、だからこういう結果が出ただろうねっていうふうにして1番成長する時っていうのは、その結果に褒められるよりも、自分が得た達成感だったりとか、そのチャレンジして判断したことを褒められた方が子供っていうのが喜ぶと思うんですけど。なので、そういうふうに判断するように多少導いてあげたらいいと思うんです。答えを出すのではなくて、そういう形で、良い判断をした時に、それから結果を出すために、みんなのためにすごく耳を傾けたとか、みんなに良い言葉かけをしたとか。それを成功させるために何か工夫をしたとか、そんなときに最高の評価を与えてあげることによって、また頑張ろうって、そう褒められるから良い判断する考え方が、良い答えを自分で探そうと思って努力しているその感覚っていうか、その感性が多分磨かれていると思うんですよ。やっぱり考えないで与えられるというのは成長ないと思うんですよ。

常に自分で考えて自分で判断をしたっていうところ。そこにどんなスポーツをやっている、どんな文科系のことをやっても、やっぱり1人ではなくて、グループで取り組んでいることが多いので、そういったところにはアプローチしてあげると子供はすごくやっぱ家に帰ってもこんなことも褒められるかと。僕がこんな判断したことによって褒められたんだって言う。と、お父さん、お母さんに言うようになるんです。だから、そういう導き方というのはすごく重要じゃないかなって思う。それは学年が上がっていくことによってさらに大きいものにチャレンジすることになったり、もっと良い判断が出来るようになったり、または、それがより早く、仲間のために、または良い結果を生むためというふうにして、徐々に育まれるのではないかなというふうに思います。

**宮下市長：** はい、ありがとうございます。もうひとかた手前。手を挙げた方どうぞ。できれば職業とか言っていただければより詳しく答えて。

**市民B：** バドミントンとサッカーのスポーツクラブを運営しているものです。ええ、組織について2点ほど伺いたいと思います。まず1つはスポーツ活動のあり方についてですが、現在、中学校、高校の部活動に関しては、青森山田高校、中学校にはちょっと、とてもバドミントンが強くてみんながそこに入りたい、もしくは青森山田を倒したい。そういう意識を持ってある程度形に作られていると思うんですが、小学生の方のチームは現在サッカーにおいても年齢構成でやれないとか、そういう状況があって、新しいクラブができては消え、そういう状態が続いていると思います。黒田監督の要望っていうかこうなっただけで希望を聞きたいんですけども、今後のサッカーの小学生レベルのチーム編成として、

いろんなクラブがいっぱいクラブが大会によってブラッシュアップされる形が望ましいのか、もしくは各地区で中規模のクラブチームの指導者がいたチームを作った方がよいのか。普通の高校生がどちらがいいと思いますか？それを1つ伺いたいです。

**黒田氏：** まあ、すごく難しい質問ではあるんですけど、例えば東京とか、大阪とか、そういった人口の多いところと、このむつっていう地域が、同じ高校生だから同じことを実践してもやっぱり効果というのはないと思いますけど。やはりこの地域、この人口、または子供たちの少子化の中でどんどん減っている状況です。やっぱりこうあっちにこっちに分散するとかいうことは、非常に苦しい状況になりますし。やはり、地元むつにはこんなクラブがあるんだ、こんな指導者がいるから、そこを逆に別にみんなが集まってくるような組織を魅力ある組織をつくっていく方向に持っていく、導いていく方が、私はその価値があるんじゃないかな。それは簡単ではないんですけど、やっぱり指導者が切磋琢磨しているところ、武者修行に行き行って学んで、そして良い情報をむつに持って帰ってくる。そういうふうにして指導者の方、自分の指導力とかリーダーとしてのやっぱりきちっと全うできるように、成長しているということがやっぱり魅力ある人間になることが色々魅力ある組織を作るといことになりますので、そういったむつに行けばこのチームがあるぞという昔の五戸高校のサッカー部とか、こんな感じのものを作っていく方が私としてはいいんじゃないかなと思います。

**市民B：** ありがとうございます。で、もう1つの礼儀に関してなんですけれども、職業柄強豪校と呼ばれるところに行くことが練習ではあるんですけども、そういう強豪校ほど足を止めるで、相手に対して正対する、そこで初

めて礼をするっていうのは徹底されている学校が非常に多いです。

一方でよくない上司や理解のない方は、苦情等ともかくやりすぎだという風に批判なんか出ています。某音楽学校のように、街中で挨拶を廃止するとか、そういうふうな流れに世の中の的になっていますが、組織としてそういう礼儀に関してやりすぎだという話をされた場合、どのような対応を取るのが正しいと思いますか？

**黒田氏：** えっとですね。今はまだ小学生ですよ。小学生であれば、言葉を発してあいさつをする。それがうるさいと言われると、なんだろうと思う。私はどんどんやるべきだと思うんですけど。あの中学校、高校、大学社会に出た時は、状況に応じてどのように挨拶するかをそのコントロールできるようになったということですね。でも大切なのは言葉を発すること、その人の目を見て笑顔で居る事。その事の方がむしろ重要だと思います。それをうるさいとか。やりすぎだと言って人のほうが私はむしろ問題だと思うんですよ。だからやってくれてること的、そういうふうな解釈をする感覚でいたほうが、むしろ爽やかだし、私はむしろ良い印象もするんですけど。大人になるにつれて挨拶をどのようにしていくっていうのは、コントロールすれば良いです。まずは、声を発すること、笑顔でその人の目を見て言葉を話すこと、そして良い印象を持ってもらうこと、または自分自身の気持ちを良くなるっていうことが、やっぱり挨拶の根底にはあると思います。私はそのほうが重要なことだと思います。

**市民B：** ありがとうございます。

**宮下市長：** もうひとかたぐらいでどうでしょうか。

はい、そうしましたら教育長をお願いします

す。

**阿部教育長：** 考え方と、あと参考にしてください。結局一番大切、重要なスキルというのは伝える力。行動が変わってなければ、指導者は伝えたくて喋っただけで、何も伝わってなければ自己満足に過ぎない。指導者というのはこうでなければと感心しました。

本当にありがとうございました。

**宮下市長：** 最後になりますけれども、今日はですね。子供たちもその活動や教育、そして部活動に関わる皆さんにこうして集まっていたいています。では、監督からむつ市にですね、激励の一言を頂ければと思います。

**黒田氏：** ありがとうございます。今日はですね。最初は講演、また、このような感じで、ディスカッションという形で2部制で参加させて頂きました。もちろん私自身も、大きな勉強する機会になりましたし、またはこれから改めてですね、子どもの向き合いというところを再確認すると言うような機会になりましたので、本当に貴重な機会をいただいたということで、市長はじめ、皆様にお礼申し上げます。

むつ市っていうその地域ですけども、私も過去3度4度程しか足を運んだことがなくてですね、子供が小さい時にあの国設ドームでフットサルをやったりとか、または、サッカーの試合を応援に来るっていう程度、または大間のマグロという、あのモニュメントの所で、写真を撮ったりっていう。あとはですね、田名部高校の80周年記念があるんですけど、記念講演ということ。まあその程度しかないんです。やはりここに来るのにはええ時間もかかるし、又は、先ほど言った5万人ほどの人口ということで、なかなかこうスポーツを根付かせるためには難しい環境だということは感じております。ただ、先ほど言っ

たように、雪国であっても、または移動が難しくなっても、やっぱりそれぞれ工夫することによって、成長することはどこの地域からでも出来るので、それは私、青森県民として、しっかりと頭に入れ、念頭において、子供達に関わっていくという事を忘れないでいてもらいたいと思います。

青森山田、野球とサッカーではこういう形で全国トップということ言われておりますけれども、まだまだ成長の過程のうち。子供を預かっているというような状況ではありますし、そういう意味ではどこの地域であってもあんまり変わらないと思います。むつからですね、また、サッカーだけではなくて、いろんなスポーツ、または文化に関しても、本当に優秀な子どもたちが出てくることを願っておりますし、昨年の東京大学合格田名部高校の生徒がおりましたように、本当に一致団結して子供を育てる、または、こういう機会を与えていただいたのも、やはり教育ということに対して子どもに対して真摯に取り組んでいるその証だと思いますし、まあそのことで、私、青森市に戻って、むつ市でこういう取り組みをしているということを声を大にして言っていきたいなと思います。また、むつ市に青森大学の方が、今度はむつの方に出来るということで、またそういう意味でお世話になることが出てくるとは思いますけれども、もしむつ市ということで、さらに近い距離の中でお互い切磋琢磨をしながらこれからの教育に携わっていかれたらと思っております。

今日は拙い話でございましたけれども、何か1つでも参考にして帰っていただければと思います。本当に本日どうもありがとうございました。

**宮下市長：** 黒田監督でした。皆さん大きな拍手をお願いします。以上をもちましてディスカッションを終了させていただきます。

**事務局：** ありがとうございました。これを持ちまして、第18回むつ市総合教育会議教育講演会黒田剛氏講演会を閉会致します。なお、本日の協議内容、経過につきましては要点をまとめた上で、むつ市公式ホームページに公表することと致しますので、ご了承ください。

最後になりますが、お手元のアンケートへのご協力を宜しくお願い致します。受付でアンケートとクリックペンを回収致しますので、係員にお渡しください。

皆様本日はありがとうございました。お気をつけてお帰りください。

(おわり)